島根県内に所在する木彫仏像・神像の樹種調査

濱　田　恒　志・田　鶴　寿弥子

はじめに

古代の木彫像を考えるにあたって、その像の用材の樹種が何であるかは根本問題だといってよい。用材の選択は造像作業の最初の段階にあたり、ゆえに、古代の人々がどのような環境や意識のもと、どのような願いを込めて造像を開始したかが、まずは用材選択に反映していると思われるからである。木彫像の樹種はこうした重要な問題をはらむが、しかしながら長い間、その判断の多くは作品調査の現場において彫刻史研究者が目視で行っており、正確性に大きな問題があった。用材を顕微鏡で観察することによってその樹種を科学的に同定する試みは、かつて小原二郎氏により大規模に行われたことがあるものの[1]、以降、体系的に行われた事例は多いとはいえなかった。

ところが平成の時代に入り、金子啓明氏・岩佐光晴氏らを中心とする研究グループによって、微細で復帰不能な小剝落片を利用した木彫像の樹種識別が体系的に行われた結果、従来の彫刻史研究者による目視の判断や、それまでの同定結果に修正が加えられる事例が発生してきた[2]。同時に、８・９世紀の一木彫像の多くにカヤ材が使用されており、白檀の代用材としての認識からそれが選択されたとみられること、対して塑像や乾漆像の構造材はヒノキが主流とみられること、11世紀以降では木彫像でもヒノキが主流に替わり、またカヤの植生から外れる地域では樹種選択が多様化すること、など多くの重要な知見が提示された。

木彫像の樹種調査は、同研究グループ以外にも広がりをみせている。その１つが京都大学生存圏研究所による一連の調査である[3]。同研究所では長年、公益財団法人美術院 国宝修理所等との間で協力関係を築き、木彫像の樹種調査についても多くの協力をしてきた。令和３年、本稿筆者（濱田）は、同研究所の田鶴氏から県内所在の木彫像について調査協力の相談を受け、同年より県内所在の平安時代の仏像・神像について調査を開始した。本稿はそのうち、現時点で樹種識別が完了した仏像・神像について、結果を報告するものである。文責は、各箇所の末尾に苗字を記してある。

木彫像の樹種識別調査は上記のとおり広がりを見せているものの、識別が可能な研究機関が限られることや、試料採取の場が作品調査や修理の現場にほぼ限られることなどから、特に地方においては現状でもなお調査の機会が多いとはいえない。島根県の彫像の場合、これまで上記の手法による樹種識別調査が実施されたのは、出雲市・萬福寺（大寺薬師）の四天王立像（９～10世紀）と、松江市・成相寺の神像群（11～12世紀）、それに出雲市・青木遺跡出土の男神坐像（10～11世紀）のみである[4]。この調査は、調査対象を日本の各地域の作例に広げてゆくことが大きな課題であり、それらのデータを収集・蓄積・公開し比較検討することによって、地域特有の樹種選択や用材観を明らかにすることが期待される。その中にあって本研究は、島根の作例を包括的に調査した初めての試みであり、平安期の島根の用材観に関する理解を大きく前進させることが期待される。なお、萬福寺（大寺薬師）以外の神像彫刻の樹種調査結果については、別稿での公表を予定している。（濱田）

１　調査の方法

本調査は、試料採取を濱田が、試料の樹種識別を田鶴氏が行う形で作業を分担した[5]。両者の役割は、田鶴氏から古代出雲歴史博物館へ文書にて調査協力を依頼してもらい、博物館から文書で回答することにより明確化した。以下、それぞれの作業の概要を示す。

（１）試料採取

本調査についての所蔵者の了解は事前に書面で得ることとし、対象作品・調査の趣旨・採取と識別の方法等を明記した所蔵者あて依頼状を作成し、所蔵者から書面にて、承諾する旨を回答頂いた（なお識別結果の公開についても、後日、所蔵者から別途書面で承諾を得た）。また対象作品が地方公共団体の文化財指定を受けている場合は、その所管部署へも調査内容を事前に知らせ、理解を得ておくこととした。

試料採取は、像の像底・干割れの中などの劣化部、あるいは像の周辺において、すでに像から剥離し復帰不可能な状態となっている木屑・微小木片のみを対象とした。用材調査として正確を期すことだけを考えれば、試料片は像本体から採取するのが望ましいということになるだろう。しかしながら、調査対象である彫像は、信仰の対象であると同時に全てが貴重な文化財であり、調査を目的として故意に破壊する行為は許されない。今回の調査でも文化財としての保存状態に影響を及ぼさないことを最優先とし、健全な部位からの新規の採取は当然ながら行っていない。採取日、対象作品、採取部位を記録したうえで試料をチャック付ポリ袋に入れ、田鶴氏へ送付した。（濱田）

（２）樹種識別

今回調査に用いた木彫像の剥離片は非常に脆く劣化が進んでいるものが多かったことから、プレパラート作成に難儀した。それぞれ水でやや湿らせたのち、両刃および片刃カミソリを用いて三断面切片を作成した。ただし、剥離片によっては、三断面すべてから切片を切り出すことが困難なケースも多かったため、樹種の絞り込みに影響したものもある。切片はエタノール：グリセリン＝１：１の混合液とともにホットプレートで加熱して薄片内の気泡を除去し封入を行った。その後、光学顕微鏡により木材組織の観察を行った。光学顕微鏡で観察される解剖学的特徴によりおおよそ木材の属レベル（時には種まで）の識別が可能でそのためのリストが公表されている。樹種同定においては、複数人での確認を行った。プレパラートおよび試料については、京大生存圏研究所にて保管している。樹種同定結果は、所蔵者あての報告書を作成し、随時報告した。（田鶴）

2　識別結果

以下、今回の調査で識別結果を得られた25例について、所蔵者ごとに識別結果と対象作品の概要を示す。作品写真と顕微鏡写真（図１～25）、それに識別結果の一覧（表１）を本稿末尾に別途示してあるので、あわせて参照されたい。掲載順は、厳密ではないが概ね制作年代の古いものが先になるように示してある。なお、法量や構造の概要も（表１）に示したが、詳細な情報については本稿末尾に掲げた参考文献を参照されたい。（濱田）

各樹種の識別根拠は以下のとおりである。

カヤ：垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材であり、早材から晩材への移行は緩やか。晩材は少ない。樹脂細胞はもたない。仮道管内壁におおよそ２本ずつ走るらせん肥厚がある。分野壁孔は小型のトウヒ型で１分野に２－３個程度。放射組織は単列。

ヒノキ：垂直・水平樹脂道のいずれも欠く針葉樹材であり、早材から晩材への移行は緩やか。晩材は少ない。樹脂細胞がみられる。分野壁孔は中型で孔口が縦に開くトウヒ型～ヒノキ型。１分野に２個であるものが多い。放射組織は単列。

ケヤキ：比較的大型の丸みを帯びた道管が年輪のはじめに１列に並んで孔圏をなす。その後小型の道管が集合して接線方向に帯状に配列する環孔材。道管は単穿孔。小径道管内壁にらせん肥厚が見られる。放射組織は異性でおおよそ８細胞幅程度。放射組織の直立部には時に大型のひし形結晶がみられる。

モクレン属（ホオノキか）：散孔材で放射組織はおおよそ２細胞幅で、すべて平伏細胞または辺縁部に直立細胞をもつ。道管は単穿孔。道管相互壁孔は対列状ないし階段状。

トチノキ：散孔材で道管は単独ないし放射方向に複合して分布。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。道管側壁は交互壁孔。道管と放射組織間の壁孔はふるい状。放射組織は単列同性で層階状配列を示す。

サクラ属（広義）：中型の丸みをおびた道管が単独あるいは数個ずつ複合し不規則に散在する散孔材。道管は単穿孔で道管内壁にらせん肥厚がある。道管内に充填物質が見られることがしばしばある。放射組織は上下端では方形から直立細胞であり、異性でおおよそ4から6細胞幅程度。

その他、識別結果に関する個別の留意事項については、各作例に応じて以下に記してある。（田鶴）

（1）出雲市・高野寺

・聖観音菩薩立像　カヤ（図1）

高野寺は島根半島の山中に所在する真言宗の古刹で、天長年間（824〜834）の開創と伝える。本像は長らく同寺庫裡に伝わり、江戸末期に本尊となった。一木造り、頭体幹部は左手の肘までを含め一材製、内刳りなし。左肘先や右肩先など後補。厳しい表情や面長の頭部、伸びやかな体部から、平安前期、9世紀半ば頃の作と考えられる。なお、通常と比べて肩が後方に張り出していることから、もとは千手観音などの多臂像だった可能性がある[6]。近在する出雲市・萬福寺（大寺薬師）の伝日光・月光菩薩立像（重文）とは面貌表現などが異なるものの、髻や着衣の形状、背面での表現の省略など近似する表現も認められる。（濱田）

（2）出雲市・日蔵寺

・十一面観音菩薩立像　カヤ（図2）

日蔵寺は出雲平野の市街地に所在。現在は臨済宗に属する。建立は貞和2年（1346）とされ、それ以前の本像の伝来は詳らかでないが、肘の内側の皺や下半身の衣文表現は雲南市・禅定寺の聖観音菩薩立像（重文・10世紀）に近く、ゆえに本像も出雲近辺での造像とみてよい。一木造りで、頭体幹部は左前膊半ばまでと右手先までを含め一材製、内刳りなし。丸く大きめの頭部や短めの胴体など全体にかわいらしい作風を示すのが特徴で、そこから制作年代は10世紀後半頃と推測される。（濱田）

（3）雲南市・長安寺

・十一面観音菩薩坐像　カヤ（図3）

・毘沙門天立像　ヒノキ科のいずれか（図4）

現在は雲南市大東町の長安寺が所蔵するが、もとは同寺が所管した大東町金成地区の観音堂に安置されていた。江戸時代以前の来歴は不明であるが、付近では平安時代に多くの密教寺院が営まれた形跡がある。十一面観音菩薩坐像は一木造りで内刳りのない古様な構造ながら表情に柔和さが垣間見え、10世紀後半の作と考えられる[7]。毘沙門天立像は細身の体軀を有し、頭体幹部を通して前後で矧いでいる（用材の劣化や後補の表面仕上げの影響で、一木割矧ぎ造りか寄木造りかは不明）。11世紀の作。同像については頭体幹部前面材および右腕材から試料を採取したが、前者は識別に至らなかった。つまり上記の結果は頭体幹部材の識別結果ではない旨、留意されたい。（濱田）

毘沙門天立像について、樹種同定に必要な解剖学的特徴の1つである分野壁孔が非常に劣化しており、属レベルの絞り込みが困難であったことから、ヒノキ科のいずれかとの記載に留めた。（田鶴）

（4）雲南市・禅定寺

・阿弥陀如来坐像　カヤ（図5）

・天部立像（その1）　カヤ（図6）

・天部立像（その2）　モクレン属（ホオノキか）（図7）

禅定寺は中国山地の急峻な山上に所在する天台宗の古刹。像高約226㎝の巨大な聖観音菩薩立像（重文）を伝えることで知られるが、同寺の阿弥陀三尊像と武装形の天部立像3軀も平安時代に遡る古像である。このうち今回は、三尊像の中尊阿弥陀像と天部像のうち2軀の識別結果を得た。

阿弥陀如来坐像は一木造り、頭体幹部は一材製で内刳りなし、両前膊先や両脚部など別材製。堂々とした体軀や太くうねりを強調する衣文が特徴で、その個性的表現が強調されることが多いが、切れ長の目や衣文の形式化

などには同寺の聖観音菩薩立像（重文）との共通点も見出せる。制作年代は10世紀後半を中心に考えるべきか。

天部立像（その１）は、一木造りで内刳りなし、両肩先別材製。凜々しい表情やバランスの整った体軀など、同寺の平安彫刻のなかでは洗練された作風をみせる。既に指摘があるように出雲市・萬福寺（大寺薬師）の四天王立像（重文）と近しい表現も認められる[8]。10世紀頃の作か。天部立像（その２）は一木造り、内刳りなし、両肩先別材製。天部立像（その１）と比べて細身の体軀であり、制作年代はやや降った11世紀頃とみられる。２軀ともそれぞれ、頭体幹部材と右腕材から同じ樹種の同定結果を得た。（濱田）

天部立像（その２）について、モクレン属と同定された。解剖学的特徴からはモクレン属に属するホオノキの可能性が考えられる。（田鶴）

（５）浜田市・多陀寺

・天部立像（その１）　ヒノキか（図８）
・天部立像（その９）　ヒノキか（図９）
・天部立像（その12）　ヒノキか（図10）

多陀寺は浜田市生湯町に所在する真言宗の寺院。寺地は日本海に面した山上にあり、石見国府にもほど近い。武装形の天部立像が少なくとも59軀伝わっており、うち保存状態が比較的良好な27軀が県指定文化財である。作風は複数に分かれるものの、像高や基本的な構造（像高130㎝前後で頭体幹部一材製、背面から内刳りもしくは背面を割矧いで内刳り、両肩先別材製）は共通しており、手分けして一度に大量造像されたものとみられる。武装形天部像を大量造像するという状況から、元の尊種は毘沙門天であった可能性が高い。制作年代はいずれも10世紀頃が想定される。今回は３軀について顕微鏡写真とともに報告する。尊像の番号については後掲参考文献『島根の仏像』に準ずる。（濱田）

上記の天部立像（その１）、（その９）、（その12）のうち、特に（その９）、（その12）については分野壁孔の劣化が激しく、ヒノキか、との同定にとどめてはいるが、3体いずれもヒノキの可能性が高いと考えられる。本論では掲載に至っていないものの、天部立像（その６）・（その８）・（その10）・（その11）の４軀についてもヒノキ科のいずれかを示す解剖学的特徴を有していた。（田鶴）

（６）出雲市・萬福寺（大寺薬師）

・老相神坐像　ケヤキ（図11）
・天部立像（その２）　カヤ（図12）
・天部立像（その３）　カヤ（図13）
・天部立像（その４）　サクラ属（広義）（図14）
・天部立像（その７）　トチノキ（図15）
・邪鬼　トチノキ（図16）
・地天像（その１）　カヤ（図17）
・地天像（その３）　ケヤキか（図18）
・鬼神形坐像　広葉樹（図19）
・鬼神形立像　カヤ（図20）
・如来像　カヤ（図21）
・地蔵菩薩立像　針葉樹（図22）

萬福寺（大寺薬師）は出雲平野の北部に所在。周辺には古墳や交通の要衝があり、古代における地域社会の１つの中心地であったとみられる。主要尊像は薬師如来坐像、菩薩立像４軀、四天王立像（いずれも重文）であり、出雲の代表的な平安時代彫刻として知られる。加えて同寺には11～12世紀の作とみられる諸像も伝わり、うち上記について識別結果を得た。いずれも一木造り、内刳りなし。尊像の呼称や番号については後掲参考文献『島根

の仏像』に準ずる。

老相神坐像は両脚部を頭体幹部材から彫出する特徴などから神像として紹介されることが多いが、胸前を寛げて肋骨の浮き出たさまを見せるのは聖僧文殊などの聖僧像に近く、尊種については検討を要する。天部立像（その２）・（その３）は直立した姿勢から、識別が叶わなかった（その１）とあわせて、もとは独尊の兜跋毘沙門天像だったとみられ、地天像（その１）～（その３）がいずれかに対応するとみられる。天部立像（その４）は頭部を欠く現状高が163.2㎝と比較的大型の像で、邪鬼（全長85.3㎝）はその法量から同像もしくは重文の四天王像のいずれかに対応するとみられ、同じトチノキと同定された天部立像（その７）に対応するとは思われない。天部立像（その７）は上半身の損傷が著しく詳細不明だが、像高や下半身の表現は天部立像（その２）・（その３）に近似する。鬼神形坐像は、交差させる手勢から兜跋毘沙門天の眷属である尼藍婆・毘藍婆と判断できる。鬼神形立像の尊種は深沙大将の可能性が高い。如来像と地蔵菩薩立像は損傷の著しい小像。（濱田）

天部立像（その４）は、サクラ属（広義）と同定した。木口面において、顕著な傷害垂直細胞間道が存在しており、ウメなどの可能性も大いに考えられるが、ここではサクラ属（広義）との記載にとどめた。地天像（その３）については試料片からのプレパラート作成に難儀したが、放射組織の特徴などからケヤキの可能性が示唆された。鬼神形坐像、地蔵菩薩立像の２体についても劣化が非常に激しく同定に至らなかったものの、少なくとも彫刻用材の観点から有益な情報であると信じて広葉樹・針葉樹についての情報のみ記載することとした。（田鶴）

（７）出雲市・鰐淵寺

・地蔵菩薩立像　針葉樹。ヒノキか（図23）

・千手観音菩薩坐像　カヤ（図24）

・僧形坐像（伝智春上人）　ヒノキ（図25）

鰐淵寺は島根半島の山中に所在する天台宗の古刹。推古２年（594）智春上人により創建されたと伝えるが草創期の詳細は不明で、史料上にはっきり現れるのは平安末期、12世紀以降である。同寺に伝わる仏像も、金銅仏を除けばこの時代以降の作が多い。上記３像はいずれも一木造りで内刳りなし、後補材を除けば現状の全容を一材で構成する。地蔵菩薩立像は、鎬立った襟や正面のY字状の衣文に平安前期の特徴を見て取れるが、顔立ちの彫りは浅く、体軀の肉取りや衣文表現に固さがみえることから、やや降った10世紀後半から11世紀の作とみるのが穏当か。千手観音菩薩坐像は丸く張った端正な顔立ちが特徴で、12世紀の作か。僧形坐像は近時まで同寺開山堂に安置されていた像で、迫真的な面貌表現から同じく12世紀の作と考えられる。（濱田）

地蔵菩薩立像について、劣化が非常に激しく、同定に難儀した。顕微鏡写真でらせん状にみえているものは、あて材に起因するものと考えられる。ヒノキか、との記載に留めた。（田鶴）

３　識別結果の考察

以上の識別結果をうけ、彫刻史の見地から若干の考察を加えておきたい。

同定樹種の集計は（表２）の通りである。25例中、カヤが最も多く11例、次いでヒノキ（「ヒノキか」、「ヒノキ科のいずれか」とされた結果を含む）が６例、以下、ケヤキ、トチノキ、モクレン属（ホオノキか）、サクラ属（広義）といった多様な樹種が見出された。

まず過半数を占めるカヤとヒノキの傾向について確認すると、９・10世紀の作はカヤが大半を占め、10世紀以降から徐々にヒノキの像が見出されるようになっていく、という傾向が指摘できよう。これは従来の説[9]を島根においても追認できることを意味する。加えて、萬福寺や鰐淵寺の結果を見ると11・12世紀でも小像ではカヤが選択されている。平安時代後期に至っても木彫像の用材は原則としてカヤと認識されつづけ、規模の大きい造像などでは適宜ヒノキその他を用いることがあったとみるべきか。

萬福寺の諸像にはカヤの他に多様な広葉樹材が使用されており、注目される。同寺では平安前期の主要尊像で

ある四天王立像がカヤ材製であるように[10]、当初は一木彫像をカヤで作るべきという認識にあったのは間違いない。今回の識別結果は、そのような場であっても時代が降るにつれ用材が多様化していったことを跡づけている。

ただし、その理由が信仰上のものなのか、単に当時の当地で入手が容易だったという現実的なものなのかは、慎重な検討を要する。同寺の天部立像（おそらく毘沙門天）や地天像では同じ尊種でありながら樹種を違える例があり、したがって樹種選択に際して尊種は必ずしも大きな要因となっていない可能性がある。これは禅定寺の天部像も同様である。萬福寺の場合、周辺は主要な陸路や水路が集中する交通の要衝であり、近在する青木遺跡から出土した木製品や柱材の樹種は多様である[11]。同寺尊像の樹種の多様性については今後の検討課題であるものの、少なくとも多様な木材を入手しやすい環境であったことは認められよう。（濱田）

おわりに

以上本稿では、このたび用材の樹種識別結果が出た県内所在の平安期の仏像・神像25例について、報告をおこなった。今回調査が叶った作例は、多陀寺を除いたすべてが出雲地方の像であるため地域的な偏りは否めず、また当然ながら県内に伝わる多くの作例のほんの一部に過ぎない。今回見出された傾向は、あくまでも今回の結果をうけた限りのものであり、さらなる正確さを得るためには、調査対象の拡張が今後の課題となるだろう。

そして用材の識別は、彫刻史の立場からいえば彫像と向き合うための第一歩に過ぎない。識別結果を、造像当時の信仰、植生、社会情勢などと照らし合わせ、造像にいたる経過や心性を復元的に検討することこそが重要である。本調査の結果を公表し広く共有することにより、島根の仏像・神像をめぐるそうした検討の進展に資することを願っている。（濱田）

本研究では、劣化部位からの剥離片を用いた樹種同定であること、そして剥離片の劣化が極めて激しかったということもあり、樹種同定において属レベル・種レベルまで絞り込めない事例も発生したが、このような調査が島根県の古代における木彫像の用材認識の解明にささやかでも役立てたなら本望である。（田鶴）

（注）

（1）小原氏の成果は次の文献に集約されている。小原二郎「研究資料　日本彫刻用材調査資料」『美術研究』第229号、1964年。

（2）主要なものは下記のとおり。

金子啓明・岩佐光晴・能城修一・藤井智之「日本古代における木彫像の樹種と用材観」・「同Ⅱ」・「同Ⅲ」、『MUSEUM』第555号・第583号・第625号、1998年・2003年・2010年

金子啓明・岩佐光晴・藤井智之・能城修一・安部久『仏像の樹種から考える　古代一木彫像の謎』東京美術、2015年

岩佐光晴「櫟野寺諸像の樹種（考察編）」、能城修一・藤井智之「櫟野寺諸像の樹種（資料編）」、以上『MUSEUM』第675号、2018年

金子啓明「「小原二郎氏旧蔵木彫像用材調査標本」について」、能城修一・安部久「「小原二郎氏旧蔵木彫像用材調査標本」の樹種」、藤井智之「魏氏桜桃とクスノキ科木材―清涼寺釈迦如来立像および東寺兜跋毘沙門天立像の用材樹種―」、岩佐光晴「クスノキ製木彫像をめぐって」、以上『MUSEUM』第679号、2019年

研究代表者岩佐光晴『平成30年度～令和３年度科学研究費補助金　基盤研究（B）研究成果報告書　東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究』、2022年

（3）同研究所の成果のうち、木彫仏像・神像に関する主要なものは下記のとおり。

田鶴寿弥子・杉山淳司・山下立「滋賀県地域における神像彫刻の樹種調査―新旧手法の適用による―」、『滋賀県立安土城考古博物館紀要』第21号、2013年

田鶴寿弥子・杉山淳司「〈解説・資料〉京都府与謝野町における神像ならびに獅子・狛犬の樹種識別調査の事例紹介」、『生存圏研究』第12号、2016年

Mechtild Mertz, Suyako Tazuru, Shiro Ito, and Cynthea J.Bogel,"A Group of Twelfth-Century Japanese Kami Statues and Considerations of Material Intentionality: Collaborative Research Among Wood Scientists and Art Historians." *Journal of Asian Humanities at Kyushu University,* vol. 7, 2022, pp.127-158.

奈良国立博物館編『令和２年度　奈良国立博物館　文化財保存修理所　修理報告書』第４号、同館、2022年所載「令和２年度　修理文化財（木造）材質調査報告」
ほか多数。

（４）萬福寺四天王立像については、前掲注２金子氏ほか「日本古代における木彫像の樹種と用材観Ⅱ」６頁、成相寺神像群については同岩佐氏『東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究』77～78頁を参照。萬福寺四天王立像はいずれもカヤ、成相寺神像群は全23軀のうち19軀が同定され、うち13軀がカヤないしカヤとみられる材、４軀がヒノキないしヒノキとみられる材、１軀がイヌマキ属、1軀がアカマツとのことである。

　青木遺跡出土の男神坐像はヒノキと同定されている。島根県教育庁埋蔵文化財調査センター編『青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）』第３分冊、島根県教育委員会、2006年、517頁ほか。同書511頁によれば同定者は伊東隆夫氏（京都大学生存圏研究所）。

（５）試料採取は、はじめ田鶴・濱田の両者立ち会いによる実施を計画したものの、当時、新型コロナウイルス感染症の流行のため県をまたぐ移動に制限のあったことなどから、田鶴氏の来県を断念した。

（６）本像を初公開した「島根の仏像」展（島根県立古代出雲歴史博物館、2017年）の会期中、観覧した複数の研究者からご意見を頂いた。

（７）濱田恒志「雲南市・長安寺蔵（金成地区観音堂伝来）十一面観音菩薩坐像と毘沙門天立像について」『古代文化研究』第24号、2016年では９世紀後半から10世紀初頭との考えを示したが、訂正させていただく。

（８）的野克之「木造天部立像」解説、『島根の文化財―仏像彫刻篇』、島根県立博物館、1990年、127～128頁。

（９）前掲注２岩佐氏「櫟野寺諸像の樹種（考察編）」91頁など。

(10) 前掲注４のとおり。

(11) 前掲注４『青木遺跡Ⅱ』515～519頁。

【調査作品の参考文献】

的野克之編『島根の文化財―仏像彫刻篇』、島根県立博物館、1990年
島根県立古代出雲歴史博物館編『島根の仏像―平安時代のほとけ・人・祈り―』図録、同館、2017年

【図版の出典】

作品写真は古代出雲歴史博物館の所蔵、顕微鏡写真は京都大学生存圏研究所にて撮影したものである。

【付記】

　本調査の実施と結果の公表については、各尊像の所蔵者各位より寛大なる御理解を賜りました。樹種識別調査においては、京都大学農学研究科杉山淳司教授、同大生存圏研究所技術専門職員反町始氏よりご助言賜りました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

　なお、本研究は、科研費C（19K01124）、京都大学人と社会の未来研究院令和4年度人文社会科学・文理融合的研究プロジェクト、京都大学生存圏研究所生存圏データベース　（材鑑調査室）共同利用による助成をうけました。

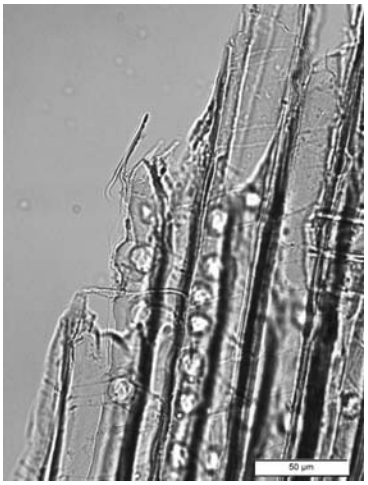


図１　聖観音菩薩立像　出雲市・高野寺（右は採取試料の顕微鏡写真、以下同じ）

図２　十一面観音菩薩立像　出雲市・日蔵寺

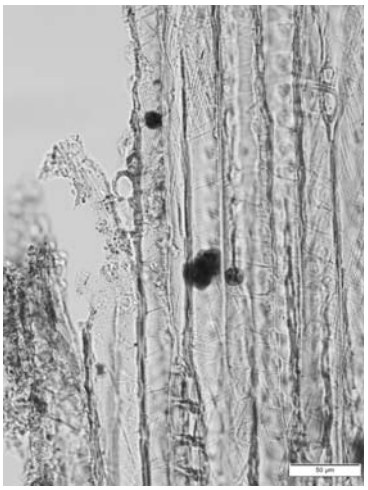


図３　十一面観音菩薩坐像　雲南市・長安寺

図 4　毘沙門天立像　雲南市・長安寺

図 5　阿弥陀如来坐像　雲南市・禅定寺

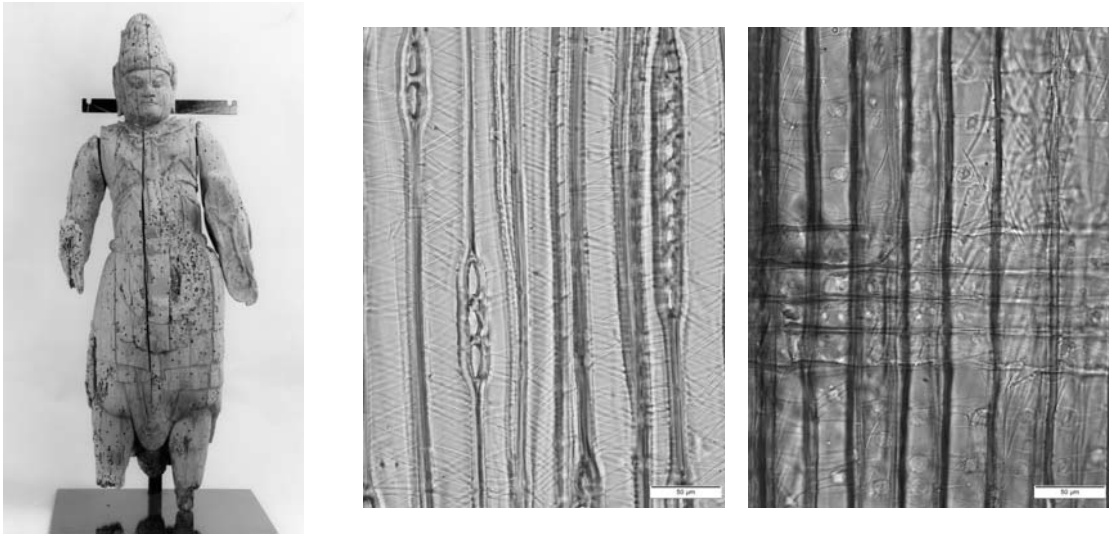
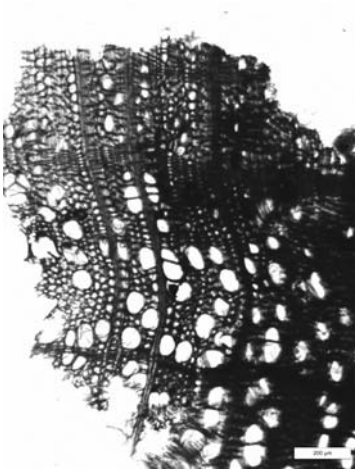
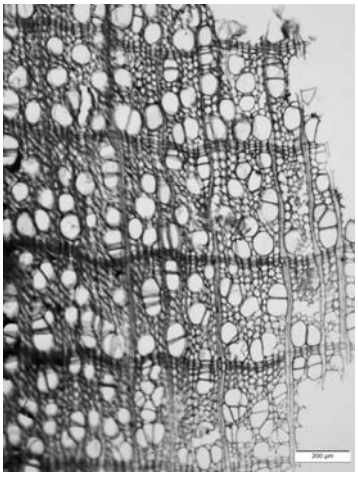


図 6　天部立像（その 1）　雲南市・禅定寺　（中：体幹部材、右：右手材）





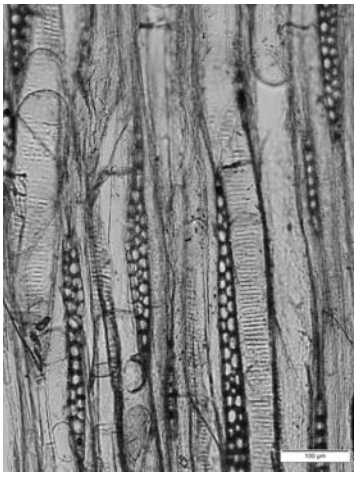


図７　天部立像（その２）、同右手材　　雲南市・禅定寺
顕微鏡写真　中段左から、頭体幹部材の木口面、板目面、柾目面
下段左から、右手材の木口面、板目面

図８　天部立像（その１）　浜田市・多陀寺

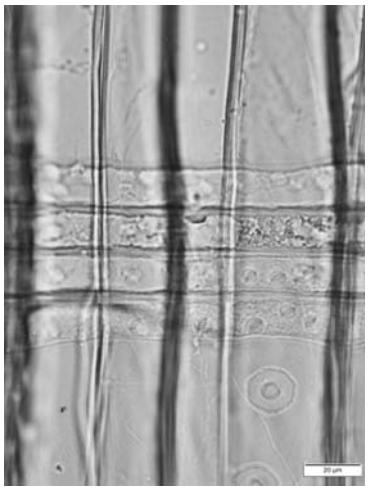


図９　天部立像（その９）　浜田市・多陀寺

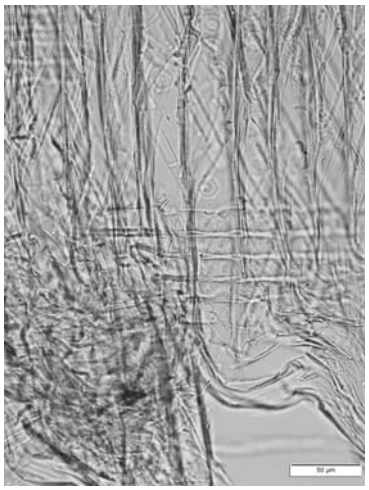


図10　天部立像（その12）　浜田市・多陀寺

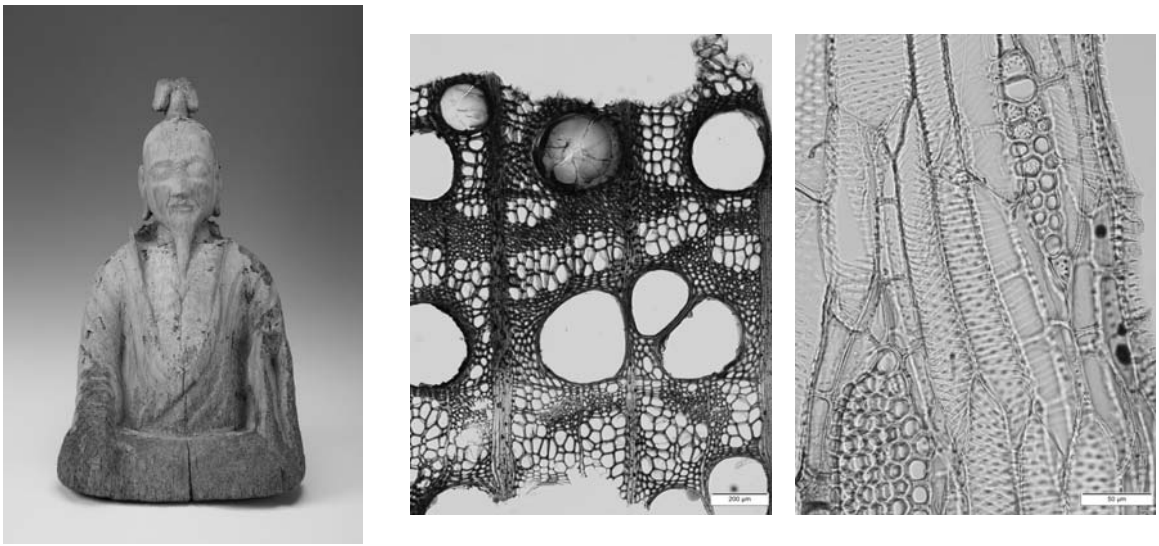


図11　老相神坐像　出雲市・萬福寺（中：木口面、右：板目面）

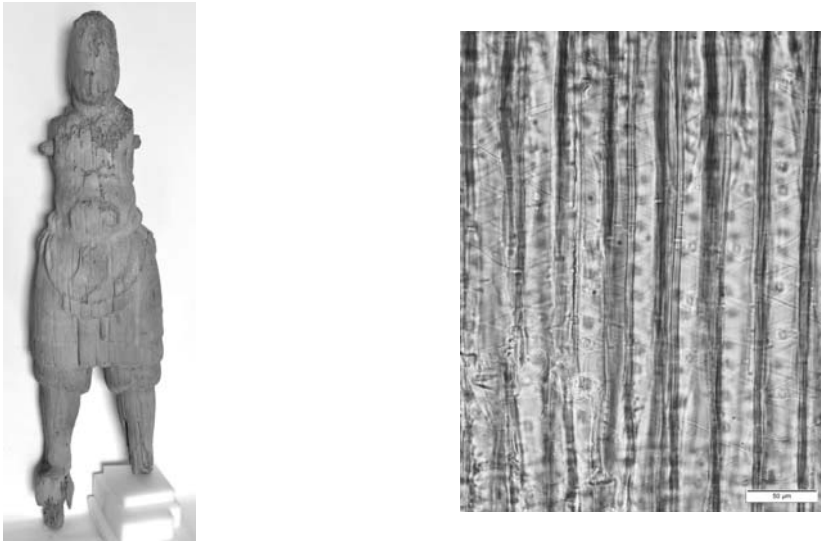


図12　天部立像（その２）　出雲市・萬福寺

図13　天部立像（その３）　出雲市・萬福寺

図14　天部立像（その４）　出雲市・萬福寺（顕微鏡写真左から木口面、板目面、柾目面）

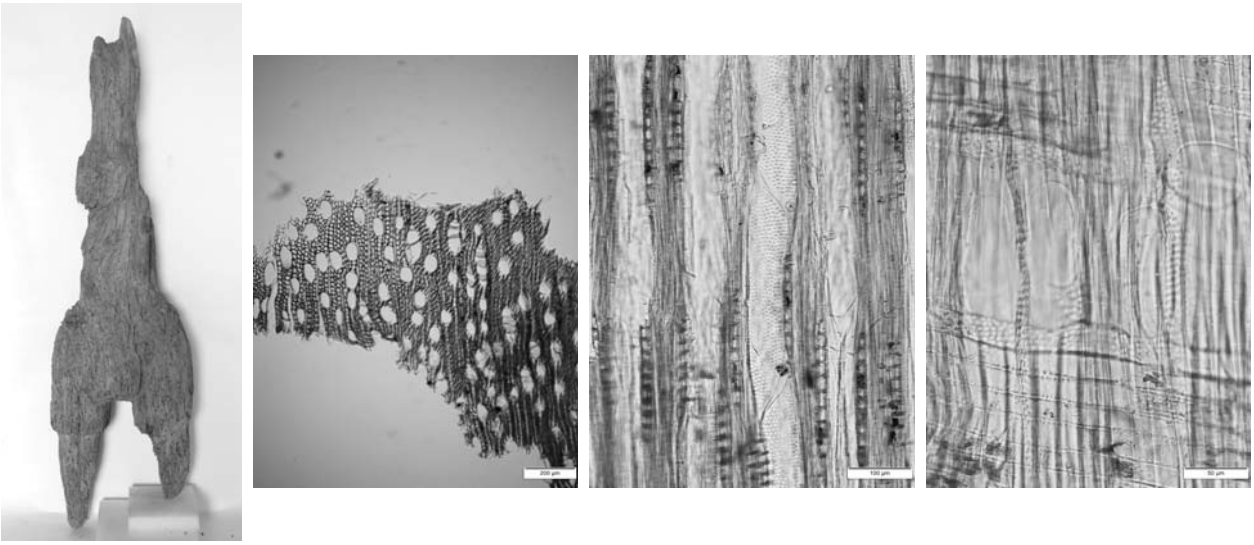


図15　天部立像（その７）　出雲市・萬福寺（顕微鏡写真左から木口面、板目面、柾目面）

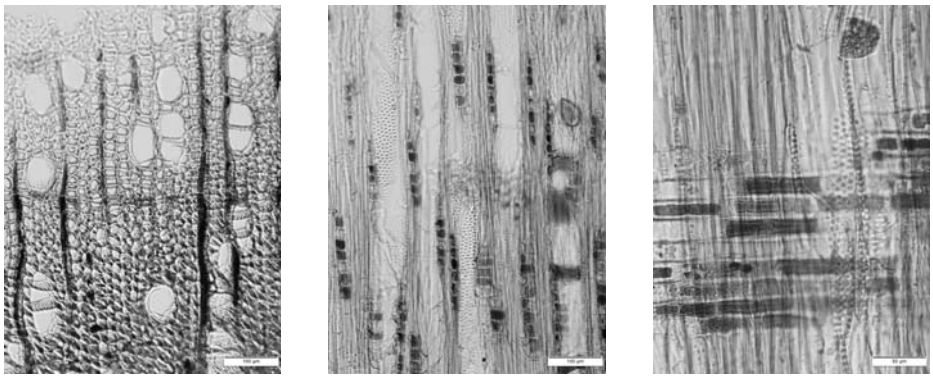


図16　邪鬼　出雲市・萬福寺（顕微鏡写真左から木口面、板目面、柾目面）

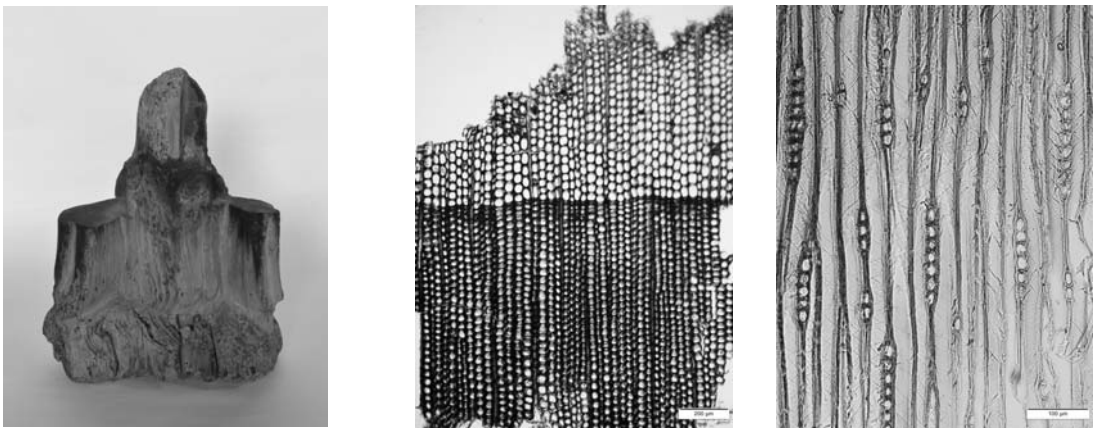


図17　地天像（その１）　出雲市・萬福寺　（中：木口面、右：板目面）

図18　地天像（その３）　出雲市・萬福寺　（中：木口面、右：板目面）

図19　鬼神形坐像　出雲市・萬福寺

図20　鬼神形立像　出雲市・萬福寺

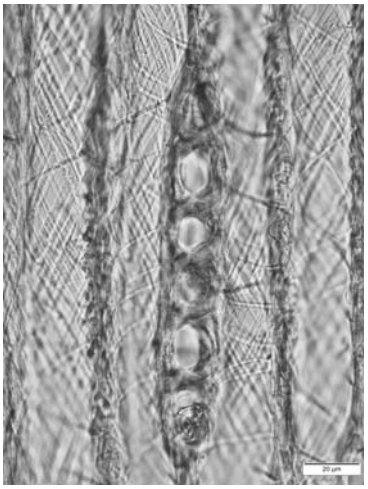


図21　如来像　出雲市・萬福寺

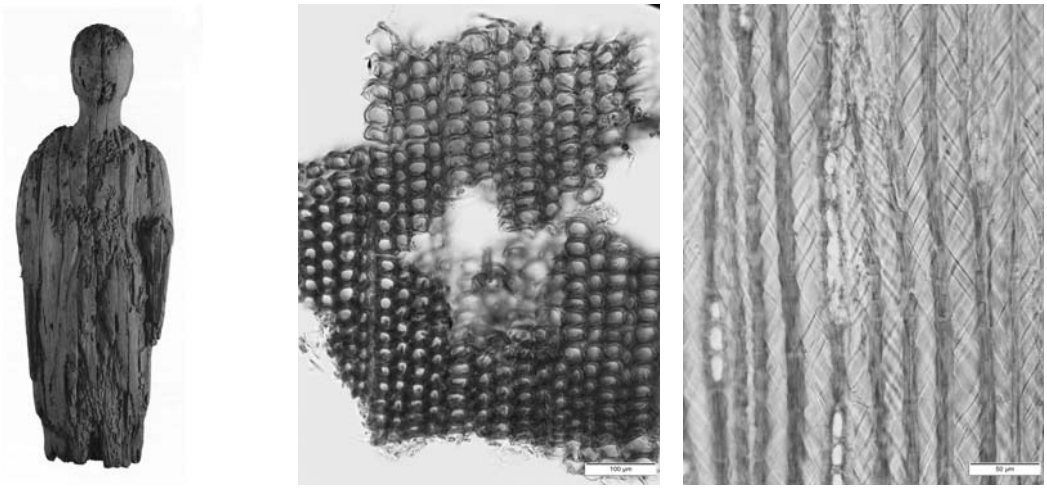


図22　地蔵菩薩立像　出雲市・萬福寺（中：木口面、右：板目面）

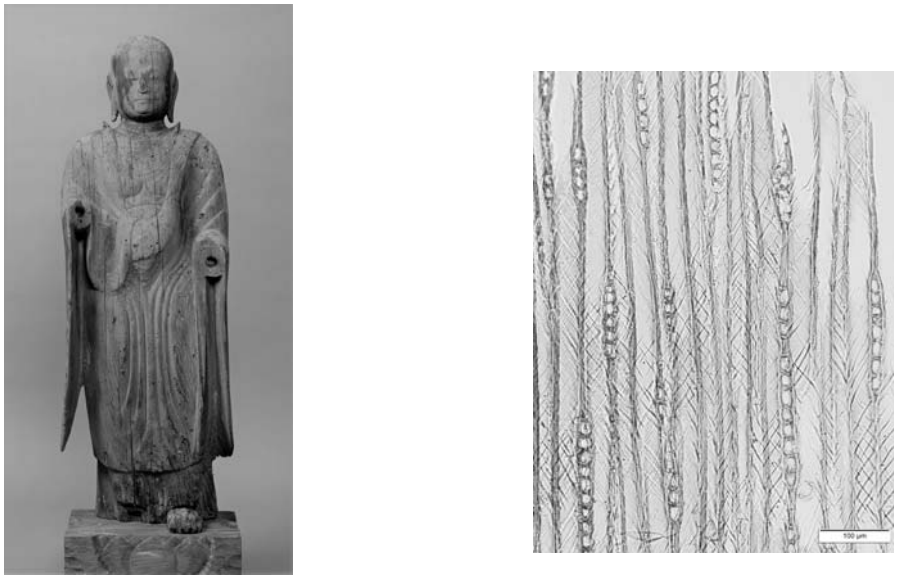


図23　地蔵菩薩立像　出雲市・鰐淵寺

図24　千手観音菩薩坐像　出雲市・鰐淵寺

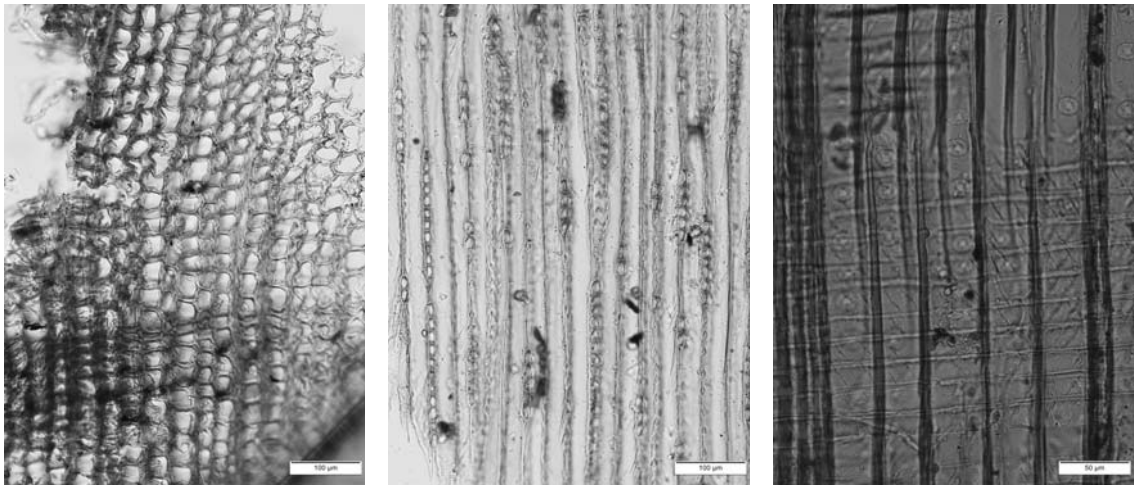


図25　僧形坐像（伝智春上人）　出雲市・鰐淵寺　（顕微鏡写真左から木口面、板目面、柾目面）

表１　同定結果

図番号	所蔵者	尊名	制作年代	同定結果	試料採取部位	法量(cm)	構造の概要	指定	参考文献での作品番号
1	出雲市・高野寺	聖観音菩薩立像	平安時代・９世紀	カヤ	右腰劣化部	像高119.7	一木造り。頭体幹部は左手肘まで含め一材製、内刳りなし。左肘先・右肩先別材製（後補）。		『仏像』1
2	出雲市・日蔵寺	十一面観音菩薩立像	平安時代・10世紀	カヤ	剥落片	像高107.1	一木造り。頭体幹部は左前膊半ば及び右手先を含め一材製。内刳りなし。左前膊半ばから先別材製。両足先後補。	県指定	『仏像』19
3	雲南市・長安寺	十一面観音菩薩坐像	平安時代・10世紀	カヤ	左腰劣化部	像高96.0	一木造り。頭体幹部一材製。内刳りなし。両手前膊半ばで別材矧ぎ。両足部横木一材製。頭上面、指先など後補。		『仏像』15
4	雲南市・長安寺	毘沙門天立像	平安時代・11世紀	ヒノキ科のいずれか	右手袖	像高98.6	寄木造りないし割矧ぎ造り。頭体幹部は通して前後に矧ぐ。内刳りのうえ割首。両肩先別材製。両手先後補。		『仏像』16
5	雲南市・禅定寺	阿弥陀如来坐像	平安時代・10世紀	カヤ	両腰から背面周りに落ちていた剥落片	像高135.0	一木造り。頭体幹部一材製。内刳りなし。両肘の外側に薄材を矧ぐ。両前膊から先別材製。両足部横木一材製。	県指定	『文化財』27 『仏像』14
6	雲南市・禅定寺	天部立像　その１	平安時代・10世紀	カヤ	体幹部材、右腕材	像高109.4	一木造り。頭体幹部一材製。内刳りなし。両肩先別材製。	市指定	『文化財』42
7	雲南市・禅定寺	天部立像　その２	平安時代・11世紀	モクレン属（ホオノキか）	体幹部材、右腕材枘穴	像高153.6	一木造り。頭体幹部一材製、内刳りなし。両肩先別材製。	市指定	
8	浜田市・多陀寺	天部立像　その１	平安時代・10世紀	ヒノキか	左腰干割れ	像高132.9	割矧ぎ造り。頭体幹部一材製。頭体通して前後に割り、内刳り。両肩先別材製（亡失）。背面材亡失。	県指定	『文化財』39 『仏像』22
9	浜田市・多陀寺	天部立像　その９	平安時代・10世紀	ヒノキか	内刳り面	像高142.2	割矧ぎ造り。頭体幹部一材製。頭体通して前後に割り、内刳り。両肩先別材製（亡失）。背面材亡失。	県指定	『仏像』22
10	浜田市・多陀寺	天部立像　その12	平安時代・10世紀	ヒノキか	内刳り面	像高135.5	割矧ぎ造り。頭体幹部一材製。頭体通して前後に割り、内刳り。両肩先別材製（亡失）。背面材亡失。	県指定	『仏像』22
11	出雲市・萬福寺（大寺薬師）	老相神坐像	平安時代・11世紀	ケヤキ	像底	像高63.2	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内刳りなし。		『仏像』6
12	出雲市・萬福寺（大寺薬師）	天部立像　その２	平安時代・11～12世紀	カヤ	周囲に落ちていた剝落片および背面	全高（右足枘含む）115.2	一木造り。頭体幹部は右足先・足枘まで含め一材製。内刳りなし。両肩先別材製（亡失）。		『仏像』7
13	出雲市・萬福寺（大寺薬師）	天部立像　その３	平安時代・11～12世紀	カヤ	左足先劣化部	像高103.7	一木造り。頭体幹部は両足先含め一材製。内刳りなし。両肩先別材製（後補）。		『仏像』7
14	出雲市・萬福寺（大寺薬師）	天部立像　その４	平安時代・11～12世紀	サクラ属（広義）	背面左腰劣化部	全高（右足枘含む）163.2	一木造り。頭体幹部は右足先・足枘まで含め一材製。損傷著しく内刳りの有無不明。両肩先別材製（亡失）。		『仏像』7
15	出雲市・萬福寺（大寺薬師）	天部立像　その７	平安時代・11～12世紀	トチノキ	正面の表面劣化部	像高98.3	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内刳りなし。		『仏像』7
16	出雲市・萬福寺（大寺薬師）	邪鬼	平安時代・11～12世紀	トチノキ	周囲に落ちていた剝落片	全長85.3	一木造り。現状の全容を一材で彫成。損傷著しい。		『仏像』参考４
17	出雲市・萬福寺（大寺薬師）	地天像　その１	平安時代・11～12世紀	カヤ	像底	像高35.5	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内刳りなし。		『仏像』8
18	出雲市・萬福寺（大寺薬師）	地天像　その３	平安時代・11～12世紀	ケヤキか	像底および周囲に落ちていた剝落片	像高25.2	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内刳りなし。		『仏像』8
19	出雲市・萬福寺（大寺薬師）	鬼神形坐像	平安時代・11～12世紀	広葉樹	像底および周囲に落ちていた剝落片	像高40.2	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内刳りなし。		『仏像』9
20	出雲市・萬福寺（大寺薬師）	鬼神形立像	平安時代・11～12世紀	カヤ	周囲に落ちていた剝落片	像高99.1	一木造り。頭体幹部一材製。内刳りなし。両肩先別材製（亡失）。		『仏像』10
21	出雲市・萬福寺（大寺薬師）	如来像	平安時代・11～12世紀	カヤ	像底	像高44.4	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内刳りなし。		『仏像」参考5
22	出雲市・萬福寺（大寺薬師）	地蔵菩薩立像	平安時代・11～12世紀	針葉樹	表面劣化部	像高50.1	一木造り。現状の全容を一材で彫成、内刳りなし。		『仏像』参考6
23	出雲市・鰐淵寺	地蔵菩薩立像	平安時代・10～11世紀	針葉樹。ヒノキか	右肩劣化部	像高93.0	一木造り。頭体幹部は両体側部も含めて一材製。内刳りなし。両手先別材製(亡失)。両足先後補。		『文化財』30 『仏像』24
24	出雲市・鰐淵寺	千手観音菩薩坐像	平安時代・12世紀	カヤ	像底	像高29.8	一木造り。現状の全容を一材で彫成。内刳りなし。両肘先、脇手や両足部など別材製（亡失）。		『仏像』26
25	出雲市・鰐淵寺	僧形坐像（伝智春上人）	平安時代・12世紀	ヒノキ	右肩劣化部	像高49.3	一木造り。頭体幹部は両足部も含めて一材製。内刳りなし。右肘や右足部の表面に後補材をあてる。	県指定	『仏像』23

※参考文献の略称　『文化財』：『島根の文化財―仏像彫刻篇』島根県立博物館、1990年　『仏像』：『島根の仏像―平安時代のほとけ・人・祈り―』島根県立古代出雲歴史博物館、2017年

表２　樹種集計

	高野寺	日蔵寺	長安寺	禅定寺	多陀寺	萬福寺	鰐淵寺	合計
カヤ	1	1	1	2		5	1	11
ヒノキ							1	1
ヒノキか					3		1	4
ヒノキ科のいずれか			1					1
モクレン属（ホオノキか）				1				1
ケヤキ						1		1
ケヤキか						1		1
サクラ属（広義）						1		1
トチノキ						2		2
広葉樹						1		1
針葉樹						1		1

総計25